

乳がん超音波検診 精査の要・不要、コツを伝授します 角田博子, 尾羽根範員(著)

徳島大名誉教授／マンモグラフィ検診精度管理中央委員会・前理事長
森本忠興

所見を拾い上げる「眼」を養う書

このたび、角田博子先生・尾羽根範員先生の著書『乳がん超音波検診——精査の要・不要、コツを伝授します』が医学書院より刊行された。マンモグラフィ検診の精度管理にかかわってきた者として、本書は超音波検診の精度管理の著書として大変に期待するものである。本書に対する推薦文を述べる。

マンモグラフィ検診精度管理中央委員会(精中委)は、1997年の設立以来、マンモグラフィ精度管理について長年にわたり携わってきた。2013年3月より、超音波関連3学会からの要請により、将来を見越して超音波検査の検診・精密検査に関する精度管理システムづくりも精中委管轄で行うこととなり、名称も日本乳がん検診精度管理中央機構(精中機構)と変更した。超音波検査の精度管理については、2004年に日本乳腺甲状腺超音波医学会(JABTS)が『乳房超音波診断ガイドライン』(南江堂、2004年)を出版し、改訂が重ねられ普及に努められてきた。このガイドラインの中に超音波検診の項目があり、角田博子先生・尾羽根範員先生がその責任者を務められ、超音波検診の要精基準の作成に携わってきている。

本書の第1章においては、癌検診の基本が述べられている。対策型検診・任意型検診の違い、癌検診の利益・不利益、不利益の種類、過剰診断、マンモグラフィと超音波検査の総合判定などである。

本書の第2章では、超音波検診の要精検基準に従い、所見を拾い上げる「眼」を養うための判別のコツ・ポイントが詳細に述べられ、さらに実際の症例が提示・解説されている。初心者や熟練者にも良いメッセージとなり、役立つものと思われる。

2015年、Lancet誌に発表されたJ-STARTの結果から、40歳代の女性に対するマンモグラフィ・超音波併用群では乳癌発見率が1.5倍高

い。特にI期の浸潤癌が約2倍の検出、0期の非浸潤癌は同率の検出(27%前後)などの結果が示された。死亡率減少効果はまだ不明であるので、超音波検査が高濃度乳房に対して住民検診である対策型検診へと導入されることはないが、人間ドックなどの任意型検診への導入がさらに進むものと予想される。

欧米では、癌検診の評価は死亡率減少効果という利益のみでなく、偽陽性、過剰診断、被曝などの不利益も考慮する必要があるとされ、不利益のうちの特に過剰診断を問題視している。過剰診断とは偽陽性を増加するのではなく、その人の生命予後に影響を及ぼさない癌を発見・診断することである。前立腺癌、甲状腺癌などの検診で知られている。欧米のデータから、乳癌検診において乳癌罹患・早期癌比率の増加がみられるが、進行癌の減少はあまりみられていない。死亡率減少効果は20%程度であるが、検診発見乳癌の約20~30%が過剰診断であると推察されている。癌検診の目的が、癌死亡率を下げるための癌の早期発見という点に集中しすぎて、発育の非常に遅いタイプの癌発見が過剰診断に繋がり、放置してよい癌を発見していることになっている。したがって、過剰診断となる可能性のある乳癌は、非浸潤性乳癌(特に低グレードDCIS)、浸潤性乳癌でも発育速度の遅いもの(ルミナルA)などがその候補である。今後、過剰診断となり得る乳癌の臨床病理学的研究、日本における過剰診断のデータ蓄積も必要である。これらのこともよく理解の上で、本書が超音波検診に有効に活用されることを望みたい。

●B5/頁176/2016年
定価: 本体6,000円+税[ISBN978-4-260-02814-1]
医学書院 刊